

ロハスキッズ



2008年1月1日発行

2007 Winter Volume 6

定価680円



ゴドモだまし
なんて
いらないよ!

特集
ムナーリ
おじさんから、
近未来の大人たちへ

心に届く、
手書きのお手紙

自由学園幼児生活団・通信グループ

動物にも人間にもたいせつなこと

親子で冬のアロマテラピー

アトリエグリズーの冬のおそと遊び

わたし色をステッチして

心がほっこりする、冬のにんじん

ホームパーティーは「ふるまい」を学ぶ場



特別付録

ロハスキッズselection

ロハスな
幼児教室&キッズプログラム
総力ガイド

素直に飛び込めば、
出会いがある

海外生活など夢にも思わなかった藤岡さん。結婚後の1990年、ご主人の藤岡幸夫さんの留学で英国に渡り、以来15年間もマンチェスターで暮らすことになった。「東京に居る人と結婚しよう、と思っていたのに(笑)。いざ渡英して生活を始めると、主人が学生で、本当にお金がなくて困りました。幸い、学生の妻は現地で働くことができたんですね、それなら何か私に出来ることがないかと、まず仕事を探し始めたんです」。

最初は言葉もうまく通じず、街の地図もおぼつかなかった藤岡さんだが、仕事を得たい懸命な気持ちから、マンチェスターで唯一の日本食レストランを訪ねる。「行ってみると日本食といいながら、オーナーは韓国人だったの。でもすぐにウエイトレスとして雇ってもらえました。オーナーがとっても良い人で、仕事も楽しかったですよ。実はそこで働いていた時に、多くの日本企業の方々と知り合うこともできて、すごく人脈が広がったんです」

海外で、日本で、子どもと向き合う 藤岡典子さんのお仕事

幼児期に外国に住み、そこで日本語を覚え、母国を知る子どもたちがいる。英国マンチェスターで、そんな子どもたちと向き合ってきた藤岡典子さんに、海外で育つ子どもたちのこと、マンチェスターの暮らしや人との繋がりについて伺いました。

撮影…大木大輔(70ページ) 取材…光内史

ったからこそ、とても親しくお付き合いができたという藤岡さん。その行動力と、明るく素直な気持ち、さらに新しい世界を拓くことになる。

いつも子どもと
接していたいから

渡英前、8年間幼児教室で先生を勤めていた藤岡さんは、そう思ううちに、日本へのホームシ



現地の駐在員、また日本企業の社長さんなど、ご主人との生活だけでは知り合えなかった、たくさんの人々と出会いがあり、交流が始まる。「その時代に知り合った方々が、関西を中心に、全国にいらつしやるんです。今でも皆さんと、家族ぐるみのお付き合いが続いているんですよ」。

ロンドンではなく、マンチェスターというアットホームな場所だ

よろしければ手伝ってくれませんか、と言ってくださったので、また飛び込んだの」。

ところが行き始めると、そこに通う生徒の弟妹で、小さい子ども達も一緒に来ているではないか。彼らは、おにいちやん達の授業が終わるまで、遊びながら待っているのだった。「補習校は週一回、学校の休日に、日本のこくご(ひらがな、カタカナ、漢字など)を習いに行く学校です。もちろん幼児部はないのですが、みなさんご希望もあって、5歳6歳児クラスをつくれることになったんですよ」。

マンチェスター日本人学校の幼児部(のようなもの)が、親たちの運営で発足し、藤岡さんは先生を頼まれる。「毎週、子どもたちに会うのが楽しみで仕方ありませんでした。その準備をすることも、本当に楽しかったですね」。

やがて、もっと小さい子どもを対象に教えてほしいとの声にこたえて、個人でマンチェスターキンダーガーデンを始めることになった。「2歳から4歳の幼児が各学年5、6人ずつ、すぐにあつまっていました。施設があるわけではな



people

いので、場所は各ご家庭の持ち回りです。お部屋を提供していただき、私は机や椅子など一式をクルマに積み込んで、持っていきまし

た」
教材は、渡英するときには何かの役にたてばと、日本から持ってきていた。「それがとっても役に立ちましたね。また、私が幼児たちに教えている間、ママたちが別室でお茶を楽しみながら、母親同士としていろいろな生活情報の交換などをされて、とても和やかな良い雰囲気でしたよ」。

きれいな言葉で話せる子どもに

藤岡さんは海外で暮らす小さい子どもたちと接するうちに、気がついたことがあった。「彼らは、もの心つくかつかないうちに、日本を離れていますよね。そうすると、どうしても日本の自然や風習、生活習慣などに、触れる機会を持っていないことがあります。そのまま知らずに過ぎていくんですよね」。意識していないと、親も気づかぬうちに、ぬけ落ちてしまう。
「例えば四季折々の植物、花、あ

るいはお正月などの行事です。もちろん、英国にいますので、全部経験することは難しいです。ただ、お正月におもちやおせち料理をいただくことは、知っておいてほしい。おせちはマンチェスターで具材を揃えることが難しいので、写真を見せて、それぞれの料理の持つ意味を教えました。秋には一緒におだんごを作って、お月見について話したり……。材料が揃う限り、出来ることを少しずつでも経験させてあげたいと、考えて工夫しましたよ。お月様はマンチェスターでもまん丸に見えますしね(笑)」
言葉については、逆にきれいな日本語が話せて良い例も多い。「ご家庭できちんとした話し言葉で接している」と、言葉がきれいに保たれます。とかく外国に暮らしていると、早く周りの環境や、学校に慣れてほしいなどの理由から、家でも英語を積極的に使ったり、親は使わなくても兄弟は英語で話す、ということになりがちですが、かえって家では日本語できちんと話すほうがいいと思いますよ」。

英語には飾り言葉がない。例えば雨を、しとしと、ざあざあ、と豊かに表現する日本語。外国に暮

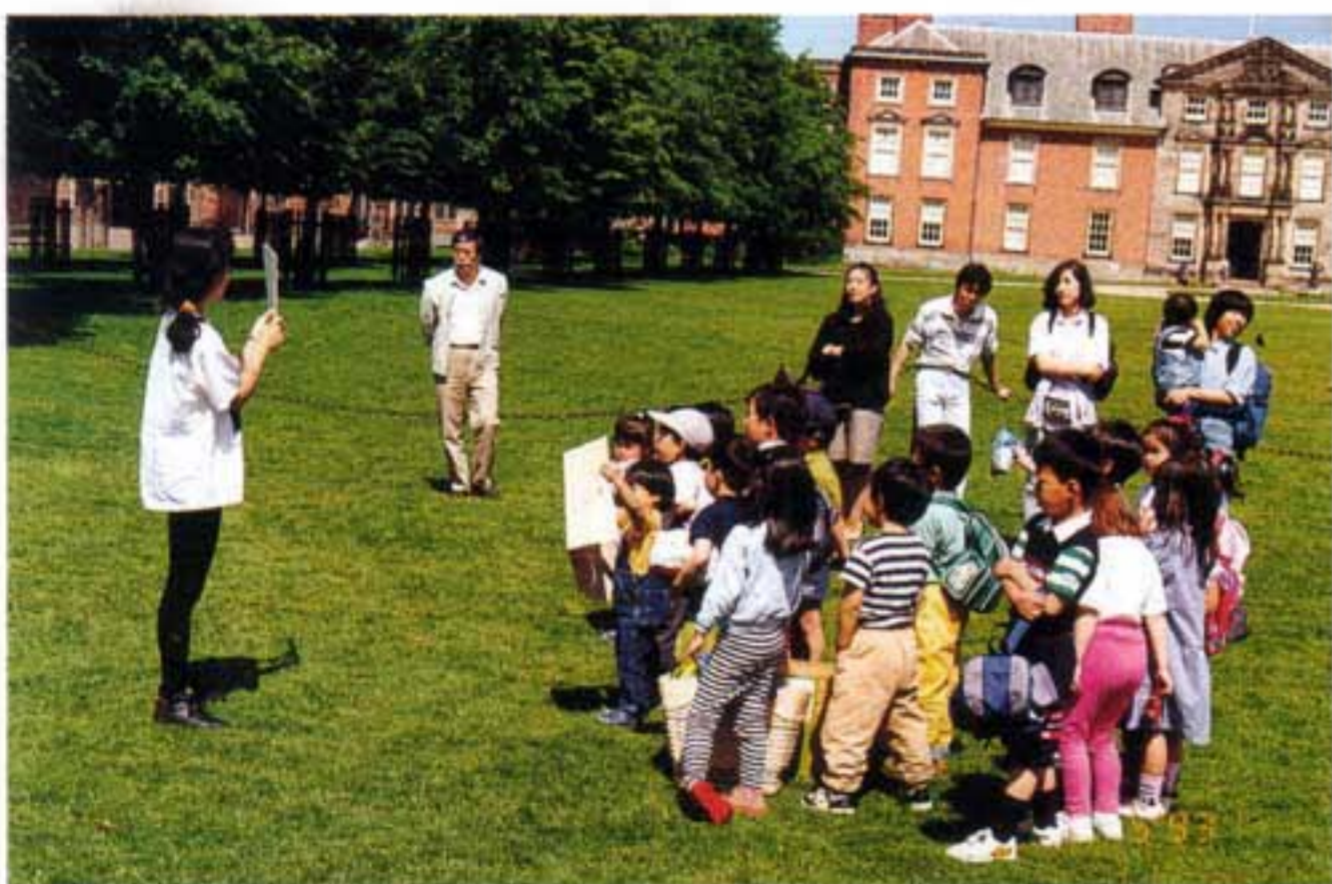
らしているからこそ、家族の中で日本の単語も意識して使い、大切にしたいと、藤岡さんは思っている。

日本に居るときには、家族全員で食卓を囲むことが難しかった家庭でも、海外で初めて家族の時間を持てることも多い。「本当の豊かさについて考えさせられますよね。日本人はコミュニケーション下手だとも言われます。言葉(英語の会話)のコンプレックスがあるか

もしれませんが、家族でゆっくり話す時間を持ち、言葉のやりとりを楽しめば、会話のセンスも鍛えられると思います。自然に絆も深まりますよね」。

今でもマンチェスターが懐かしく、よく里帰りの気持ちで行くという藤岡さんには、実は現地ですらすら英国人の人々も、家族のよう

な存在だ。「ホストファミリーの人々からは、典子もマンキューニア(地元っ子)になつてきたねえ、なんて言われるんですよ」。お隣のおばさん、牛乳屋さん、郵便屋さんのジョージも、クリスマスプレゼントを贈りたい、今も大切な友人たちなのだそうだ。



補習校近くのタットンパークへの遠足。子供たちはのびのびと遊び、お弁当を食べ、芝生で紙芝居(遠足で迷子になった子の話)を聴く。心とからだを使って楽しむ彼らに寄り添い、見えない力をひき出す、とても幸せな時間だ。

藤岡典子

ふじおか・のりこ ●1962年生まれ。日本で8年間、幼児教室の先生を続け、1989年に結婚。ご主人の留学先、英国マンチェスターでは約15年間、日本人補習校の幼児クラス(5-6歳児)及び、日本人キンダーガーデン(2-4歳児)の先生を勤める。指揮者藤岡幸夫さんの最大の理解者であり、支援者としても活躍中。